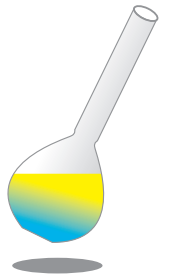


アカデミックをめざそう!

東京女子医科大学
東医療センター 脳神経外科 教授
糟谷 英俊 かすや ひでとし



マイクロサージェリーを脳神経外科に導入し発展させたヤサジル先生と



平成16年4月から新しい研修医制度が導入されました。医学部を卒業して2年間は、アルバイトは禁止となり、その分病院から十分な給料をもらって研修できる制度です。これまで、病院からの給料はほんの少しいたため、卒業して1〜2年はアルバイトへ行って生計をたてていました。今の制度になり、日本

全国どこの病院で研修をつけることも可能です。人気があるのは給料が高く、患者数の多い大都会の有名病院で、地方大学は(前期)研修医の確保が難しくなっています。この制度以前は、卒業後に大学の医局に入って教育を受ける場合がほとんどでした。複数の先輩医師から指導を受け、いくつかの関連病院に勤務して研修を積み重ねます。多くの医師は研究に何年間か身をおき、博士号をとり、あるいは留学して見聞を広げて自分の将来像をつかんでいきます。

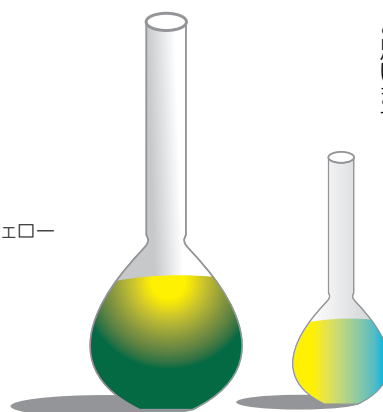
現行制度のもと、2年間の前期研修を終了した後、これまでのように大学医局に入局し、さらに研鑽を積む医師もたくさんいます。しかし、大学がそれに相当する組織に属さず、その

まま引き続いて一般病院に籍を置き、実地医家の研修を積み医師が増えているようです。2年間釜の飯を二緒に食へ、勧誘もされ、居心地よければこのまま勤めようと思つても知れませんが、私はこのことを危惧していません。医師としての長い人生のなかで、1年でも研究の世界に身をおいてもらいたいです。

病院に勤務していても、世界の医学雑誌は読むことができます。臨床研究を積極的に行っている施設もあるかも知れません。私は一度臨床を離れ、比較的自由な時間を持ち、実験計画を練り、研究する立場から論文を読み、基礎的な研究を行うことが極めて大切と思っています。私自身は、卒業して大学に属しながら、いくつかの関連病院に派遣され、そこでさまざまな先輩の先輩医師に教えを請い、大学に所属して臨床研究を続けました。その後、北米へ留学をして、そこで、実験医学に触れました。世界中に友人ができました。3年間、臨床を離れたのですが、日本に帰って、久しぶりに患者さんに接し、手術を行った時のことをいまでも忘れません。すべてが新鮮でした。何か生まれ変わった自分のようで、決して3年間のブランクなどなく、新しい目で患者さんに接することができたのです。

略歴

- 昭和57年3月 徳島大学医学部卒業
- 57年5月 東京女子医科大学脳神経外科 研修医
- 59年4月 伊勢崎佐波医師会病院 医員
- 61年4月 東京都立荏原病院 医員
- 63年4月 山梨厚生病院 脳神経外科医長
- 平成元年 7月 東京女子医科大学脳神経外科 助手
- 2年 8月 カナダ アルバータ大学脳神経外科 リサーチフェロー
- 4年 7月 米国シカゴ大学脳神経外科 リサーチフェロー
- 5年10月 埼玉県済生会栗橋病院脳神経外科 医長
- 9年10月 東京女子医科大学脳神経外科 助手
- 14年10月 同 講師
- 19年 4月 東京女子医科大学 脳神経外科 教授
東医療センター 診療部長



病院で研修をつけることはよいことであるとは思いますが。しかし、そのまま大学を離れて実地医家の研修を積んでいくことには賛成できません。できれば、大学がそれに相当する施設に属し、医学研究を行うことから、世界の広さとサイエンスの奥深さを知るチャンスを持ってもらいたいです。さらに、医学研究に対する興味を持ち続け、できればアカデミックなポジションを目指してもらいたいと思います。